

野山の花

— 身近な山野草の食効・薬効 —

城西大学薬学部 白瀧 義明 (SHIRATAKI Yoshiaki)

ドクダミ *Houttuynia cordata* Thunb. (ドクダミ科 Saururaceae)

6～7月ごろ、山歩きの途中、人家近くの湿り気がある半日陰地で白い花びらのようなものをつけた植物を見かけることがあります。葉がハート型をしているのも特徴です。その葉を揉むと何とも言えない独特の臭いがします。これがドクダミです。ドクダミは東アジア一帯に分布し、日本では低湿地で普通に見られる多年草です。茎は無毛で直立し高さ15～50cmになり、葉は互生、有柄、無毛、心臓形をしていて長さ4～8cm。茎葉ともに緑色ですが、暗紫色を帯びることもあります。“ドクダミ”という名は特異臭がするので「毒を溜めている」ことによるという説、「毒下しの妙薬」を縮めたという説などがあります。また、生薬名の“ジュウヤク”は中国名の「戟」によりますが十種の薬に値するという意味から同音の「十薬」あるいは「重薬」の字が通用していると思われます。他にも花が十の字に見えとか、重宝する薬草だとか、これも、また、諸説があります。花と見えたのは、茎の先端についた小さな花の集まりで、個々の花は黄色の花が穂状に多数ついたものなのです(穂状花序)。そして、4枚の花弁に見えたのは一番下の花の苞なのです。個々の花は1本の雌しべと3本の雄しべからなり、^{がく}萼と花弁はありません(無花被花)。

特異臭の本体は decanoylacetalddehyde (デカノイルアセトアルデヒド)、laurylaldehyde (ラウリルアルデヒド) などの精油成分で、強い抗菌作用があります。この臭いは乾燥すると揮散し無くなります。また、葉にはフラボノール配糖体の quercitrin (クエルシトリン)、花には isoquercitrin (イソクエルシトリン) を含



写真1 ドクダミ (花1)



写真2 ドクダミ (花2)



写真3 ヤエドクダミ



写真4 ハンゲショウ

み、利尿、強心、血管収縮作用などがあります。花期の地上部を採り、直ちに陽乾したものをジュウヤク(十薬, Houttuyniae Herba) とよび、煎剤を化膿、腫瘍、胎毒、蓄膿などの解毒薬として、また利尿薬や緩下剤としても使われます。民間では生の葉を少し火にあぶり、腫れ物、化膿、痔疾等にはりつけると有効であるといわれ、センブリ、ゲンノショウコとならび日本3大民間薬の一つでもあります。

近年、八重の品種(ヤエドクダミ)や葉がカラフルで庭などに植えられるゴシキドクダミが市販されています。科名の Saururaceae (ドクダミ科) ですが、語源はギリシア語の「サウロス・ウーラー」に由来し、「トカゲの尾(しっぽ)」の意だそうです。ドクダミの穂状花序からは想像しにくいのですが、同科のハンゲショウ *Saururus chinensis* の花序を見れば、納得できますね。また、ドクダミの英語名は fish mint といい、魚の生臭さを想像させます。

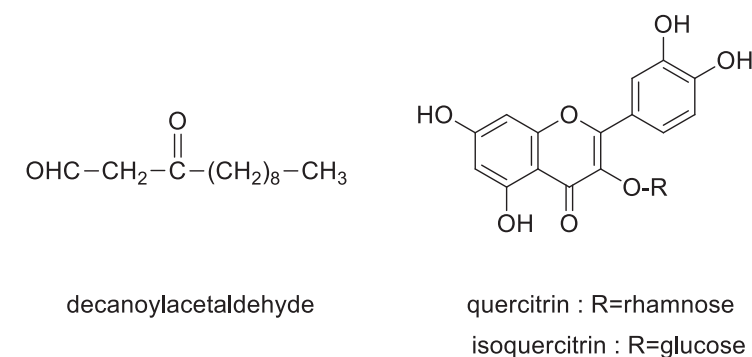


図1 成分の構造式